

ピーマンにおける天敵を用いたアザミウマの防除

～ポイントは早めの放飼と化学農薬の使い方～

1. はじめに

県内の促成栽培ピーマンでは、薬剤感受性が低下したミナミキイロアザミウマが発生し、化学農薬による防除が困難となっている。そのため近年、捕食性天敵であるスワルスキーカブリダニ（以下、スワルスキーと略記）の利用を始めたが、十分な防除効果が得られない事例がみられる。そこで、スワルスキーの安定的な利用に役立ててもらうため、現地での導入実態を調査した。

2. スワルスキーについて

スワルスキーはアザミウマ類、コナジラミ類、チャノホコリダニなどを好んで捕食し、増殖力が旺盛なうえ、花粉なども餌とすることから定着性の高い天敵製剤として販売されている。これまでの天敵製剤の多くは害虫発生初期に放飼するのが一般的であったが、本剤は害虫の発生前から予防的に放飼することができる。

3. ケーススタディ ー成功事例と失敗事例からー

御坊市のピーマン栽培は9～10月に定植し、11月頃から翌年7月まで収穫する。現地ほ場において2013年12月から2014年5月まで約2週間隔で、花上でのスワルスキーとアザミウマ類の個体数およびアザミウマ被害果を調べた。また、農薬散布歴や栽培管理方法を生産者から聞き取った。調査ほ場のうち、スワルスキーによるアザミウマ類防除が成功したほ場Aと失敗したほ場Bでの事例を以下に紹介する。

ほ場Aでは、10月下旬にスワルスキーを放飼後、調査期間を通じて定着が確認できた。アザミウマ類の密度は20頭/30花以下で推移し、被害果率も低く抑えられた（図1）。ほ場Aでは、天敵に対する影響が小さいチェス顆粒水和剤、プレオフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、アルバリン顆粒水溶剤といった農薬を併用していた。

一方、ほ場Bでは、11月中旬に天敵への影響が

大きいハチハチ乳剤を散布したため、1か月経過後の12月中旬および1月下旬にスワルスキーを放飼したが定着せず、アザミウマ類が多発して被害果が多くなった（図2）。定着しなかった要因として、農薬の影響のほか、スワルスキーの活動が鈍る厳冬期に放飼したことが考えられた。

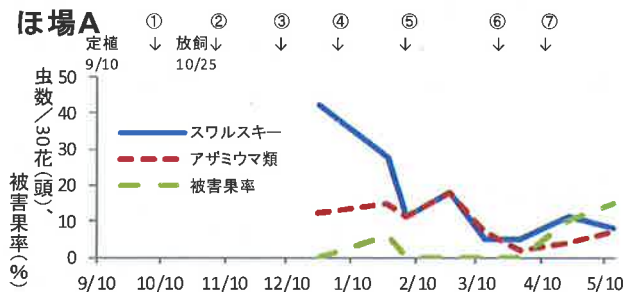


図1 スワルスキーによる防除が成功したほ場Aにおける天敵数および害虫数と被害果率の推移

①コテツフロアブル②チェス顆粒水和剤、プレオフロアブル③フェニックス顆粒水和剤、スターマイトフロアブル、コルト顆粒水和剤④チェス顆粒水和剤⑤マッチ乳剤、プレオフロアブル⑥マッチ乳剤、チェス顆粒水和剤⑦アルバリン顆粒水溶剤、フェニックス顆粒水和剤

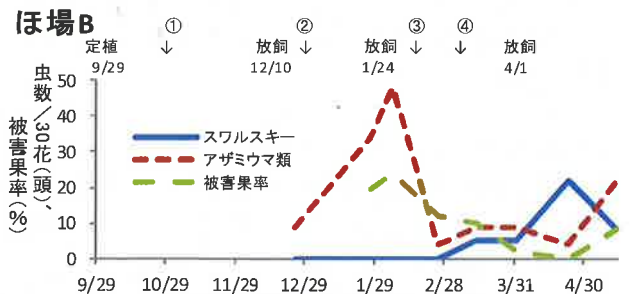


図2 スワルスキーによる防除が失敗したほ場Bにおける天敵数および害虫数と被害果率の推移

①ハチハチ乳剤、コルト顆粒水和剤、②マッチ乳剤、チェス顆粒水和剤、③マッチ乳剤、アルバリン顆粒水溶剤、④ベストガード水溶剤、プレオフロアブル

4. おわりに

スワルスキーによる防除効果を安定して得るためには、10～11月の放飼で定着させることと、アザミウマ類の密度を下げるために天敵への影響が小さい化学農薬を併用することが重要であることが認められた。

(環境部 井口雅裕)